

The Red Badge of Courage 戦場におけるある 1 人の青年の成長

野 中 陽 介

はじめに

*The Red Badge of Courage*¹ は 1895 年に出版されたスティーヴン・クレイン (Stephen Crane, 1871-1900) の代表作である。この小説は、1 人の若者が戦場という極限状況の中で変化していく過程を描いたものである。これまで一切戦闘経験のなかった作家が書いたとは思えないくらいに戦争の情景や兵士の心理などが正確に描かれている点が評判を呼び、翌 96 年にはベストセラーとなり、クレインは弱冠 25 歳にして一躍有名作家となった。

しかし、この作品を「1 人の若者の人間的成長を描いた物語」と解釈すべきかどうかについては意見が分かれる。というのも、主人公が最終的に成長を遂げたかどうかについて様々な議論がなされているからだ。一般になされている解釈は以下の 3 つに大別される。

1. 冒頭部と結末部の主人公を比較すると、彼には精神的変貌は全く認められない
2. 主人公は過酷な戦争体験を通じて人間的成長を果たした
3. 成長できたともできなかったとも言い切れない

このように主人公の成長について解釈が分かれてしまうのは、クレインの作品が「自然主義小説」として広く知られていることに原因があると思われる。渡邊 (140) によれば自然主義小説の場合、登場人物には自由意志や自由な選択はなく、全ては外の社会環境や内なる遺伝によって決定されるため、大抵の場合、人間的成長について考察することに何ら意味を持たないのである。

しかし、*The Red Badge of Courage* は若者の「イニシエーション物語 (Initiation Novel)」とする見方も強い。「イニシエーション物語」というのは、無知で純真な若者が大人（ないしある特定の集団）の世界に「参入 (initiation)」するために経験せねばならない様々な人生体験を軸に展開する物語である。その意味で、この作品は純粹無垢な若者の戦争体験を通じたある意味での成長を描いているという見方が出来る。

以上のことを踏まえて、本論では、*The Red Badge of Courage* における主人公が戦争という危機的状況の中でどのような成長を辿っていくのかについて考察していきたい。

Ⅰ．理想と不安の狭間で揺れるヘンリー

この作品の筋をかいつまんでまとめるとこんなことになるだろうか。物語は、南北戦争の北軍に志願したヘンリー (Henry Fleming) という名の若者を中心に展開する。ギリシャ時代の英雄に憧れを抱いていたヘンリーは、田舎を出て戦場で武勲を立てたいという思いから母親の反対を押しきって戦争に参加する。ところが、実際の戦争は彼の抱いていた理想とは違っていた。進軍したり待機したりするだけで、単調な日々が続く中、ヘンリーは自分がはたして勇猛果敢に戦えるかどうかという不安に襲われる。

やがて戦闘が始まると、彼は味方の兵が逃げ出すのにつられて敵前逃亡し、自分の隊とはぐれ、森の中に迷い込む。そこで彼は、1つの腐乱した兵士の死体を発見する。その恐ろしい光景に恐怖した彼は、やっとの思いで森から抜け出し、負傷した兵士の隊列に加わる。そこで同じ連隊仲間の「のっぽの兵士 (the tall soldier)」ことジム (Jim Conklin) と再会するが、彼は過酷な戦場で致命傷を負っていた。やがてジムの死を見届けると、ヘンリーは退却していく味方兵の行列に加わり、戦況について聞こうと1人の兵士を引き止めるが、相手は早く逃げたい一心で銃を振り回し、それがヘンリーの頭に当たる。それまで彼は周りの兵士が負傷している中、どこも傷を負っていないことに後ろめたい気持ちを感じていたが、皮肉にも味方兵によって「勇

気の赤い印 (The red badge of courage)」としての傷を負ったのである。途中で仲間の兵の助けを借りて、どうにか自分の隊に戻ってみると、彼の受けた頭部の傷は名誉の負傷だと誤解されて手厚い看護を受けることになる。

翌日、ヘンリーは、昨日は敵の進撃に怯えていたのが嘘のように、勇敢に戦う。味方の旗手が倒れたときは、「どら声の兵隊 (the loud soldier)」こと親友のウィルソン (Wilson) と共にその軍旗を守り抜き、さらに敵軍の軍旗を2人で奪うという手柄を立てる。やがて戦いが終わり、これまでの2日間の激戦を振り返るとき、ヘンリーは果敢に戦ったことを誇らしく思うが、一方で前日に戦場を逃亡したことを恥じる。しかし、次第に罪の意識を遠くに放り出すくらいに回復し、遂に彼の目がいくつかの新しい方向に向かって開かれ、ヘンリーは静かな成長を遂げたように見えた。あとには、川の上を金色の日光が鉛色の雨雲を通して射していた。

この作品は24章から成っているが、ヘンリーが兵士に志願する前の時期を第1章で扱っているのを除けば、実質わずか2日間の戦闘がヘンリーの視点を通して描かれている。1日目の戦闘は不安と恐怖に駆られるヘンリーの下降期に相当し、2日目は恐怖を克服した彼の上昇期に相当する。1章から12章までが戦闘1日目を扱った前半部であるとするならば、2日目を扱った後半部は13章以降ということになる。

まずは、兵士に志願するあたりのヘンリーの行動と心理について考えてみる。

ヘンリーは、幼い頃から戦争に対して強い憧れを抱いてきた1人の若者である。作中でヘンリーは「若者 (the youth)」と称されており、本当の名前はこの作品を通してほんの数回しか出てこない。しかも、出てくるのは決まって会話文の中だけであり、地の文でヘンリーと呼ばれることはない。敢えてヘンリーを「若者」と表記することに、クレインの抱いている一般的な若者という考えがうかがわれる。彼は幼少の頃からあまり家を出たことがなく、いつも母親の傍につきっきりだった。そんな家庭の庇護のもとに育ってきた彼が、古代ギリシャ時代の勇敢な戦いを夢見て、戦場で武勲を立てている自分の姿を何度も思い描く。毎日のようにやってくる北軍の決定的勝利の知ら

せに連邦中が沸くなか、自分も戦争に参加して英雄的活躍をしたいという彼の思いが次第にかき立てられていく。母親は1人息子の参戦に反対するが、彼は自分の野望に降り注ぐ黄色い光（yellow light: 黄色は臆病の象徴）に反逆する。そして、戦いの報が届いたことを告げる教会の鐘が鳴り響いたとき、興奮に我を忘れて、入隊することを決心する。

One night, as he lay in bed, the winds had carried to him the clangoring of the church bell as some enthusiast jerked the rope frantically to tell the twisted news of a great battle. This voice of the people rejoicing in the night had made him shiver in a prolonged ecstasy of excitement. Later, he had gone down to his mother's room and had spoken thus: "Ma, I'm going to enlist." (8)

クレイン研究の代表的1人として知られているストールマン（R. W. Stallman）は、この場面について次のように述べている。

This psychological tumult began when Henry heard the church bell announce the gospel truth that a great battle had been fought. Noise begins the whole mental melee. The clanging church bell and then the noise of rumors disorder his mind by stirring up legendary visions of heroic selfhood. (Stallman 195)

偉大な戦いの様子を告げる教会の鐘の音が、ヘンリーの英雄になりたいという思いを刺激し、彼の入隊を決定づける切っ掛けとなったのである。しかし、問題は、ヘンリーを入隊へと駆り立てた味方軍の戦況の知らせが実は「誇大な報道（the twisted news of a great battle）」だったという点である。北軍が圧倒的に優位の場に立っていることを誇張して伝えられたために、アメリカ北部の人々は「誇大な報道」に踊らされ、北軍が絶対に勝てるという錯覚を持ったのである。軍部の不利なことは一切伝えられず、日本軍の勝利を信じ

て疑わなかった第二次世界大戦時の日本とまさに同じ状況である。ヘンリーもまた、“His education had been that success for that mighty blue machine was certain; that it would make victories as a contrivance turns out buttons.” (57) とあるように、ボタン製造機が次々にボタンを作り出すように青色の軍（青＝北軍）が絶対的勝利を取めることを教え込まれてきたのである。「誇大な報道」によって戦意が高揚したヘンリーは、幼少から思い描いてきた理想を実現できるかもしれないという望みを抱き、戦場の地に赴くことを決意する。

ところが、実際に彼を待っていたのは、目的も分からずに進軍したり待機したりするだけの単調な軍隊生活であった。彼の連隊が戦地に着いてからも、ただじっとして体を暖めている以外にほとんど何もしていなかった。実際の戦争が理想とかけ離れていたと分かったとき、ヘンリーは行進する自分たちが「巨大な青色の見世物の一部（a part of a vast blue demonstration [10]）」にすぎないと見なすようになった。そして、ヘンリーは、自分の自由意志によって入隊したのではなかったのだと反省する。

As he perceived this fact it occurred to him that he had never wished to come to the war. He had not enlisted of his free will. He had been dragged by the merciless government. And now they were taking him out to be slaughtered. (21)

このときになって、ヘンリーは自分が無慈悲な政府によって騙され、半ば強制的に戦場に引き出されたのだと悟る。北軍に参加すれば自分も戦場で英雄になれるかもしれないという考えがいかに浅はかで甘いものであったかをヘンリーは思い知ったのだ。無知で人生経験の乏しい、夢見がちな若者ヘンリーはここで初めて現実の壁にぶち当たったのである。

こう考えると、ヘンリーが入隊したのは彼の自由意志による結果ではなく、無慈悲な政府という「外なる環境」の激流に巻き込まれたことによるものであった。人間は遺伝的な要素や社会環境に支配された存在にすぎないという自然主義の人間観がここに描かれていると言えないこともない。やがて、彼

は自分が恐怖に駆られて戦場から逃げ出すのではないかという不安に襲われるようになり、次第に自信を失っていく。自分の抱いている不安を誰かに打ち明けたいと願うが、不安をさらけ出すことで他者から見下ろされることが嫌で打ち明けることが出来ない。他の仲間達が陽気な調子で行進している様子を見て、彼は軍隊という社会の除け者であると思い込み、疎外感と孤独感に陥ってしまう。

こうした危機に直面したヘンリーはやがて、自分が「未知数」であることに気が付き、自分が戦場でどのような行動をとるかについて予測するのに「これまでの生き方」は全く参考にならず、今後の自分を予測するためには、戦場で新しい「実験」を行なって自分についての情報を集めていくことが唯一の方法であると結論づける。

He felt that in this crisis his laws of life were useless. Whatever he had learned of himself was here of no avail. He was an unknown quantity. He saw that he would again be obliged to experiment as he had in early youth. He must accumulate information of himself, and meanwhile he resolved to remain close upon his guard lest those qualities of which he knew nothing should everlastingly disgrace him. (11)

ヘンリーにとって戦場は未知の経験であるため、戦闘時の自分の行動は全く予測がつかない。他の兵士達が逃げれば彼もそれに釣られて全力で逃げるかもしれないし、みんなが踏みとどまって戦えば彼も最後まで逃げずに戦えるかもしれない。答えを得るためには、自ら危険な戦場に身をさらしてみるしかない。

ヘンリーは以前に、男は戦場では別の人間になれると教えられたことがあったが、彼はそのような変身の中に自分への「救済 (salvation)」があることを信じていた。戦場に飛び込んで、自分が本当は伝統的な勇気を兼ね備えた人間であることを発見したいと願っていた。自然主義的な環境決定論を信じていたクレインは一方で、それでも人間はどんな状況下でも生き抜いて

いけるような積極的な生き方ができることの可能性も信じていた。1897 年にギリシャ＝トルコ戦争へ従軍したクレインは、そのときに現実の戦闘を体験し、かつて想像力で書いた *The Red Badge of Courage* が「間違っていなかった」ことを確信した。彼はまた、米西戦争に自発的に赴いて、勇敢な行動をとり、自らの可能性を実証しようとした。自らの可能性を試すためにわざわざ死地に赴くという自己破壊的行動は、必ずしも良い結果を生み出さないが、彼は自分が危険な場所に身を投げることでしか得られない変身の可能性というものを強く信じていた。クレインのそのような面が、ヘンリーに投影されていると思われる。

II. 森の中で現実を突きつけられるヘンリー

ヘンリーが戦場でどのような行動をとるかについての 1 つの答えが出てくる。間もなく戦闘に突入することになるからだ。敵の進撃の第一波をどうにか生き残った彼は、1 つの過酷な儀式を終えたという実感と共に嬉しさと安堵が込み上げてくるが、不意に敵軍の逆襲を受けてしまう。味方全員が絶望に陥る中、ヘンリーもまた眼前に突きつけられた過酷な現実を受け入れることができなかった。そして、勇敢に戦うことを望んでいたのに、そばにいた兵士たちが逃げ出すのにつられて彼も戦場を逃亡してしまうという理想とは全く反した行動をとってしまう。彼の恐怖心は、敵を異常なまでに誇張してしまう。まるで日没まで戦うようにネジを巻かれた鋼鉄製の機械人形を彷彿とさせる敵の進軍、残忍な歯を剥き出しにしてニヤリと笑っているかのようにこちらに目がけて飛んでくる砲弾、暴れ馬を引いている 1 人の青年の「やがて死にゆく者の顔」、これら全てはヘンリーの恐怖心から生じた幻覚ともいえるような光景である。そのうちに、敵軍を抽象的で得体の知れない「恐るべき竜の猛攻 (an onslaught of redoubtable dragons)」とみなすようになる。

To the youth it was an onslaught of redoubtable dragons. He became like the man who lost his legs at the approach of the red and green monsters. He

waited in a sort of horrified, listening attitude. He seemed to shut his eyes and wait to be gobbled. (36)

ヘンリーがこのような恐怖心を抱き敵前逃亡をしたのは、生命維持の本能が咄嗟に働いたからであろう。「恐るべき竜」はそうした彼の本能から生じたビジョンであると言えるのかもしれない。

逃亡したあとに、味方の軍が敵軍を食い止めることに成功したという知らせがヘンリーの耳に入り、彼は一介の兵士として許されざる罪を犯したことを恥じるが、軍隊の小一部分である自分の身を守ったことで立派に本分を果たしたのだと自分を正当化しようとする。同時に彼は、自陣を死守し、その結果、英雄となった味方兵士らに腹を立てる。次第に、同僚や戦争、さらには運命に対してまで憎しみを抱くようになる。

やがてヘンリーは、野原を離れて森の奥へと入っていく。奥へと進んでいくにつれて戦場のけたたましい音は次第に遠ざかっていき、森の中の風景がヘンリーに安らぎを与える。そして、危険を察知したリスが逃げ惑う光景を見て、自分の逃亡が自然の法則に適ったものであると悟り、自分の行為は正しかったのだと彼は誇らしい気持ちになる。

He threw a pine cone at a jovial squirrel, and he ran with chattering fear.

The youth felt triumphant at this exhibition. There was the law, he said. Nature had given him a sign. The squirrel, immediately upon recognizing danger, had taken to his legs without ado. (41)

自分の主張を裏付ける証拠を得たヘンリーは、しかしながら、それが自然の全てではないことをすぐに知ることになる。彼はこの後、小さな獣が黒い沼に飛び込み、きらきら光る魚をくわえて現われるのを目撃する。

Pausing it one time to look about him he saw, out at some black water, a small animal pounce in and emerge directly with a gleaming fish. (41)

魚が獣に捕食される光景を通して、ヘンリーは弱肉強食の掟を目の当たりにする。自分たち兵士は戦争という「恐るべき竜」に捕食されるだけの存在なのだという過酷な事実を暗示していると思われる。

さらに森の奥を突き進んでいくと、高い枝がアーチ状に交差して、神々しい礼拝堂を思わせるような深部へと辿り着く。ところが、その入り口のところでヘンリーは腐乱した兵士の死体を発見する。その死体の放つ「死んだ魚の腹 (the side of a dead fish)」のような眼差しに彼は萎縮し、たちまちその場を逃げ出してしまう。

He was being looked at by a dead man who was seated with his back against a columblike tree. The corpse was dressed in a uniform that once had been blue, but was now faded to a melancholy shade of green. The eyes, staring at the youth, had changed to the dull hue to be seen on the side of a dead fish. The mouth was open. Its red had changed to an appalling yellow. Over the gray skin of the face ran little ants. One was trundling some sort of a bundle along the upper lip. (41)

ストールマンは、ヘンリーのこの神聖な森からの逃亡について次のように述べる。

Henry's flight from the forest sanctuary represents his momentary rejection of womb-like innocence; periodically he rejects Mother Nature with her sheltering arms and her "religion of peace," and his flight from Mother Nature is symbolic of his initiation into the truth of the world he must measure up to. He is the deceived youth, for death lurks even in the forest sanctuary. (Stallman 195)

森はヘンリーにとって自分の良き理解者であり、「汚れなき母親の胎内 (womb-like innocence)」のようなものであった。母親の胎内は最も気持ちを

安らげる場所であり、文学や芸術などにおいてはしばしば取り囲まれたイメージを母親の胎内と結びつける。その代表的な例は洞窟である。洞窟は住居としてのイメージが最も明白であるが、墳墓としての用もあてられていたという事実から、洞窟は最初の住居であると同時に最後の住居でもある。そして、それは母親のイメージ、死のイメージとなる。洞窟の中に埋葬することは母への回帰である。洞窟は自然の墓であり、母＝大地が準備する墓である。いわゆる「胎内回帰」である。(バシュラール 209)

いくらか話が逸れたが、「胎内回帰」のイメージはそのまま「森」にも適用できるだろう。森は、例えばホーソー (Nathaniel Hawthorne, 1804-64) の作品では悪魔が棲む場所として描かれている。それに対して、クレインの作品における森のイメージは、「聖なる場所、母親の胎内」として描かれているように思われる。実際に、「悲劇をひどく忌み嫌う女 (a woman with a deep aversion to tragedy [41])」という表現から、ヘンリーはこの森を女性として想像している。

しかし、まるで「胎内回帰」を髣髴とさせるように森という母親の胎内へと引き寄せられて来たヘンリーを待ち受けていたのは、およそ神々しい場所に似つかわしくない腐乱した兵士の死体という森の裏切り行為であった。どんな神聖な場所にも死という現実が常に付きまとっているという事実を森はヘンリーに突き付けたのである。

先のストールマンの引用にもある通り、ヘンリーの森からの逃亡は彼自身が「いつか達しなければならぬ現実世界の真実への参入 (initiation)」を象徴していると思われる。事実、この森での出来事は、生命の維持と肯定、弱肉強食の掟、死などといった現実をヘンリーにもたらした。しかし、このときのヘンリーには厳しい現実を受け入れる段階にはまだ至っていない。あくまで森の中の死体は死についての恐怖を彼に植え付けただけであり、死は人間が生きることの一部であるという認識にはまだ到達していない。それどころか、ヘンリーの自然に対する認識が、「平安を与えてくれる母親的存在」から「苦痛をもたらす敵対者」へと変化していく。

Sometimes the brambles formed chains and tried to hold him back. Trees, confronting him, stretched out their arms and forbade him to pass. After its previous hostility this new resistance of the forest filled him with fine bitterness. It seemed that Nature could not be quite ready to kill him. (43)

中川は、イバラがヘンリーの進路を敵意でもって妨害するこの描写を解説して、

しかし自然はそれまでとは全く姿を変えて彼の前に立ち塞がる。今や平安を与えないばかりか死の臭いを漂わせた自然は、脱出を試みるヘンリーの進路を阻み、それまでとは逆に彼にとって悪意と敵意に満ちた敵対者となる。(中川 57)

と述べているが、自然が自分に対して敵意を向けてくると感じたヘンリーは、厳しい自然の掟に絶望してしまう。

Ⅲ. ジムの身代わりの死

戦場から森への逃亡後、再び戦場に戻ったヘンリーは、そこでいくつもの死体が横たわっている光景を見て、自分は戦場のこの死者が領有する一画では侵入者 (invader) なのだというを実感する。そして、ようやく彼は、負傷した兵士の群れが集まっている場所に辿り着く。兵士たちの傷だらけの体は、彼らが巻き込まれた戦争という怪物の恐ろしさを物語っていた。

1 人のぼろ服の兵士 (the tattered man) がヘンリーにしきりに話しかけてくる。大砲や鉄砲の音を聞いても逃げずに勇敢に戦えたことを誇らしげに語るその男は、どこか怪我はないかとヘンリーのことを心配してくる。その親切がヘンリーの敵前逃亡への後悔と罪意識をえぐり、顔を紅潮させて逃げるようにその男のもとから離れていく。しかし、彼の行くところは常に負傷兵たちで溢れていた。ぼろ服の兵士の質問がもとで、今では彼は、自分の恥が

浮き彫りになっているような気がして、いっそう罪悪感に苛まれる。彼は負傷兵たちを羨ましそうな目で見ていた。

At times he regarded the wounded soldiers in an envious way. He conceived persons with torn bodies to be peculiarly happy. He wished that he, too, had a wound, a red badge of courage. (46)

ヘンリーは、負傷兵たちのように「勇気の赤い印 (a red badge of courage)」である名誉の負傷を持っていない自分を恥ずかしく思う。

このあと、ヘンリーは戦友のジム・コンクリンと再会する。彼は、過酷な戦闘の中で致命的な傷を負っていたようで、まるで幽霊のように何かを虚ろな様子で見つめていた。そんなジムを見て驚いたヘンリーは、彼を助けようとするが、ジムは何処か安らかに死ぬ場所を求めて走り去ろうとする。死地を追い求める彼の様子には「狂気の宗教に帰依した信者のような儀式めいたものがあつた。」やがて、ジムは目的の場所に辿り付くと、木が倒れるときのようにゆっくりと前へ傾き、ヘンリーの目の前でそのまま息を引き取ってしまう。

この作品の中で、ヘンリーは何度か死者と対面するが、その中でも非常に大きな意味を持っているものは2つ、すなわち1つは森の中での腐乱した死者、もう1つはジムの死であろう。この2つの死はいずれもヘンリーに死という不可避な現実と直面させた。戦争に参加するにあたり彼はただ戦場で勇敢に戦って武功を立てることばかりを考えていたが、死について深く考えるようなことはおそろくなかったであろう。そんな彼が目撃した森の中のおぞましい死体は、死の持つ恐ろしさというネガティブな印象を彼に与えるだけであつた。

では、ジムの死はヘンリーにどのような影響をもたらしたのであろうか。「厳粛な儀式 (a solemn ceremony [49])」であるジムの死に立ち会ったヘンリーは、ジムの脇腹に「狼が噛み付いたかのような傷 (the side looked as if it had been chewed by wolves [50])」があるのを見て、戦争という捕食者の餌食と

化した兵士の悲惨な姿を再確認する。ジムの死もまた、弱肉強食という逃れられない法則が支配する自然の姿をヘンリーに突き付けたのである。だが、“To the two watchers (Henry and the tattered man) there was a curious and profound dignity in the firm lines of his awful face.” (50) とあるように、森の中のグロテスクな死体に恐怖したヘンリーは、死にゆくジムの恐ろしい顔に刻まれた険しい皺の中に奇妙な深い威厳を感じたのだった。ジムの死は、ヘンリーにとって「身代わりの死 (vicarious death)」²の象徴であり、この戦友の死によって彼は死に対する強迫観念的な認識から解放されることとなる。(渡邊[136]を参照) ジムの「身代わりの死」を通して、死というものがただ恐れ敬遠すべき別の世界の対象としてではなく、自然の一部として人間の受け入れなければならない必然であり、自分の世界の中にも当たり前のように存在するということを悟る切っ掛けを彼は得たのである。やがて、彼は死の恐怖から解放されて、生きることに常には死が伴っており、生きるうえで死の恐怖を乗り越えていかなければならないことを理解するのである。この認識への到達は、必ずしも大人としての成長を意味するものではないが、人間として1つの成長を果たしたものと言えるかもしれない。しかし、このジムの「身代わりの死」は、ヘンリーの人間的成長にとって単なる1つの契機となったにすぎない。今後、彼は更にいくつかの段階を経て、人間としての高い認識へと到達していくことになる。

そして、そんなジムの壮絶な死に対して何の感情も示さないように、「赤い太陽が封緘紙のように空に張り付いている (The red sun was pasted in the sky like a wafer. [50])」のを見て、自然は自分たちに平安を与えてくれることも敵意を仕向けてくることもなく、ただひたすら悠久の生を淡々と営んでいるのみであるということをヘンリーは同時に悟る。ヘンリーの自然に対する認識は、「慈愛に満ちた母親のような自然」から「悪意に満ちた敵対者としての自然」という変遷を辿り、今や、ジムの死の儀式を通して、「善意も悪意もない、中立的存在としての自然」へと変わっていったのである。自然ははじめから自分ら人間に対して特に何の関心も抱いておらず、敵だとか味方だとかいった考えを持つこと自体がナンセンスなのである。

このような認識に到達したことで、ヘンリーは以前に森の中で突き付けられた厳しい自然の摂理を受け入れられるようになったのである。

IV. 謙虚な人間への変身

ジムの死によって死の恐怖を乗り越えたヘンリーだが、しかしながら、彼が戦場から逃亡したことの罪意識は依然として彼を苦しめていた。同僚の「どこか怪我はないか」という何でもない質問がヘンリーにはナイフの一突きのように鋭く、全てが明らかになるまで容赦なく秘密を暴こうとする矢のようなものに思えた。おめおめと自軍のところに戻れば、嘲笑の嵐が待ち受けているであろうことを恐れたヘンリーは、「道徳的自己弁護 (a moral vindication)」が必要不可欠であると思った。そうでなければ、彼は一生不名誉という辛いバッジをつけて生きていくことになってしまうからだ。彼は「勇気の赤い印」としての名誉の負傷を欲していた。というのも、“Such a badge would grant to Henry membership and acceptance in the group, would assuage his guilt and close the gap between himself and the others caused by his alienation.” (Wolford 46) とあるように、「勇気の赤い印」はいわば軍隊の一員であることの証であり、それによって彼の罪は清められるのである。

ところが、前線の様子を尋ねようとして、退却してくる兵隊の1人の腕を掴むが、その兵はうるさいとばかりに銃でヘンリーの頭を殴る。そして皮肉にも味方兵によって「勇気の赤い印」としての名誉の負傷を授かったのである。

自軍の野営地に辿り着いたときに、ヘンリーはたまたま自軍の兵から受けた傷を戦闘中の勇気ある行動ゆえに受けた「勇気の赤い印」と見なし手厚く迎えてくれた戦友たちの誤解を訂正しようとはしなかった。勇敢に戦った者のみに与えられるはずの名誉の印が彼の恥ずべき行為への罪意識を表面的に覆い隠してしまい、皮肉なことにそのような偽りの印によって彼はずっと憧れ続けてきた英雄として周囲に認められたのである。そして、戦友であるウィルソンの献身的な看護のお陰で、戦地に来てから長いこと味わえなかった安

らかな眠りにつくことができた。

こうしてこの作品の後半部に当たる2日目を迎えるわけだが、ヘンリーの再生と変身はここから始まるのである。

When the youth awoke it seemed to him that he had been asleep for a thousand years, and he felt sure that he opened his eyes upon an unexpected world. (67-68)

翌朝目覚めてみると、ヘンリーの目に映る森の光景は、昨日とは変化していた。「礼拝堂 (the sanctuary)」として彼の目に映っていた森が今や死体のように疲れ果てた兵士達を包み込む「納骨堂 (a charnel place)」もしくは「死者の家 (the house of the dead)」として映っている。死に対する彼の認識の変化がそのまま自然風景描写の変化に反映されていると思われる。

しかし一方で、逃亡の罪意識を偽りの赤い印で覆い隠すことのできたヘンリーは、その赤い印を盾のように掲げることで自尊心を取り戻すが、その代償として田舎暮らしで培ってきた素朴さを徐々に失っていき、抜け目のない大人の性質を帯びてくるようになる。道德上の責任は容易く逃れられること、応報の神はのろまで目くらであることなどを知り、自分は神に選ばれた人間であるからきっと運命は自分に味方をしてくれるという傲慢な考えに陥ってしまう。

そんなヘンリーとパラレルをなす存在であると同時に彼の成長の生きた手本として登場してくるのが、負傷したヘンリーを手厚く看護してくれた戦友のウィルソンである。ウィルソンはこの作品の初めの部分にも出てくるが、このときは、地の文で「どら声の兵士 (the loud soldier)」と称されているように、大声を上げることで虚勢を張って自分の見せ掛けの勇気を誤魔化すような傲慢な強い人間であった。ところが、のちにヘンリーと再会したときの彼は、もはや以前とはがらりと変わっていた。彼は戦場の恐ろしさを通じて、いかに自分自身がちっぽけな存在であるかを知り、謙虚に生き抜いていく姿勢へと変化していったのである。このウィルソンの人間的成長は、ヘ

ンリーが変貌を遂げていくうえで大きな意味を持つのである。なぜなら、ヘンリーはウィルソンの成長の軌跡をほぼそのまま辿っていくことになるからである。この時点でのヘンリーは、自分のことは棚に上げて戦場から必死で逃げてきた兵士達を軽蔑したり、自分の冒険談を故郷で誇らしげに語る様を想像したり、ウィルソンの不器用な看護に大声で非難している点などを見ると、以前のウィルソンの横柄さや傲慢さに通じるものがある。かつてジム・コンクリンが死の恐怖を乗り越えて生を全うする姿勢をヘンリーに示したように、ウィルソンもまたヘンリーの人間的成長の指針としての象徴的役割を果たすこととなるのである。

実際に、ウィルソンの成長のあとを追うヘンリーは、更なる認識の変化を遂げることとなる。一向に戦況が好転しない中、ヘンリーは自分達の指揮官たちに対して怒りを露わにする。しかし、ウィルソンは、自分達が勝てないのは將軍達のせいではなく、単に自分らに運がなかったせいだと言う。それに対してヘンリーが大声を張り上げて猛反発するが、1人の同僚の「お前1人で戦場を戦ってきたのか？ (Mebbe yeh think yeh fit th' hull battle yesterday, Fleming. [76])」という皮肉めいた一言に彼は脅威を感じ、自分を偉く見せようとするような思い上がった気分はすっかり消えてなくなってしまう。

The youth, nevertheless, felt a threat. His mind shrank from going near to the danger, and therefore he was silent. The significance of the sarcastic man's words took from him all loud moods that would make him appear prominent. He became suddenly a modest person. (76)

この兵士の一言によって、ヘンリーは虚勢と偽りの赤い印に覆い隠された罪を意識し、「謙虚な人間 (a modest person)」として変身を遂げる1つの切っ掛けを得るのである。

やがて、ヘンリーは再度戦闘へと投げ込まれるわけだが、臆病風に吹かれた前日の彼とはうって変わって、攻撃してくる敵軍に対して怯むことなく勇敢に立ち向かう。しかし、一見、彼はずっと夢見ていたギリシャの英雄的

気質を手に入れることが出来たように思えるが、“[S]o the blind rage that turns him into a hero, a flag-bearer in the end, is mere animal rage.” (Beaver 71) とあるように、彼の活躍は自分を苦しめる敵軍への動物的な憎しみによって成し得た蛮勇的行為にすぎないのである。進軍してくる敵に向かって激しい憎悪を剥き出しに一心不乱に銃を撃ちまくるヘンリーの姿はまるで「戦争の悪魔 (war devil)」であった。しかし、自分が野蛮人のように戦っていたことに対して、ヘンリーは、立派で大変な行為であったと自分を評価する。これによって彼は山のような障害を乗り越え、自分が憧れている英雄的存在となったと彼は錯覚したのだ。

It was revealed to him that he had been a barbarian, a beast. He had fought like a pagan who defends his religion. Regarding it, he saw that it was fine, wild, and, in some ways, easy. He had been a tremendous figure, no doubt. By this struggle he had overcome obstacles which he had admitted to be mountains. They had fallen like paper peaks, and he was now what he called a hero. (81)

しかし、同時に彼は、“And he had not been aware of the process. He had slept and awakening, found himself a knight.” (81) とあるように、どうやって英雄になれたのか自分でも理解できず、本当に自分が憧れの英雄に生まれ変わったのかどうか疑問を抱いているようにも思われる。

以後も、ヘンリーはますます激情に駆られて戦闘に臨むこととなる。味方軍の援護のために、ヘンリーの所属する部隊を派遣することを決定した将校は、その部隊を「ラバ追い (mule drivers)」だとか「土方 (mud digger)」みたいに戦う連中の集まりであると言い放つ。その話を盗み聞きしていたヘンリーとウィルソンは薄ら寒いものを感じる。まるで森の一部分を掃除するために箒であるヘンリーたちの部隊を使ってくれといったような言い草である。ヘンリーは、自分達が軍隊という巨大な組織の中の単なる部品、いくらでも取り替えがきく部品でしかないという現実を突き付けられたのである。

ここでヘンリーは、自分が戦場の中でただの1つの駒にすぎないことに気が付くと共に、かつてウィルソンが辿った「謙虚な人間」への変身の更なるきっかけを得たのである。

彼は自分達をらば迫いと言い放った将校らを見返してやりたいという憎しみを抱いて戦場に出る。将校に対する憎悪と敵軍に対する憎悪が相まって、ヘンリーは武勇伝的活躍を果たす。彼は、戦場の中で自分の集中力が研ぎ澄まされていくのがはっきり見てとれた。葉っぱの1枚1枚、ふわふわ漂っている希薄で透明な蒸気、木の幹のざらざらな質感、兵隊1人1人の表情、これら全てが彼にははっきりと知覚できた。しかし、彼には「どうして自分がこの戦場にいるのか ([E]verything was pictured and explained to him, save why he himself was there. [87])」という根本的な問題が理解できない。ギリシャ時代のロマンスの世界に憧れて戦場にやってきたはずなのに、憎悪によって心を支配され、まるで北欧伝説の「狂戦士 (berserker)」のように凶暴の限りを尽くして戦う彼にはもはやそのような理想は過去のものでしかないのかもしれない。

やがて、ヘンリーの内面の変化が明確に現れてくる。自分らをどなりつけ、無謀な命令を下す「若い少尉 (the young lieutenant)」に対する奇妙な友愛と平等の感情がヘンリーの中でいつしか芽生えていた。生きて帰れないかもしれない戦いに駆りだされるという過酷な運命を共にする上官や同僚たちに対して彼の中で不思議な連帯意識 (comradeship) が芽生えるのである。これまでのヘンリーは、自分のことしか頭にないような人間であったが、戦場という危機的状況を皆で共に乗り越えていくうちに、彼は自分への関心を失い、自分は1人ではなく一員であるという境地に至ったのだ。つまり、‘I’ から ‘we’ へと変化していったのである。そして、

His soul is saved when the battle-bond of brotherhood is born within it, and is found plainly of deeper import than the cause for which he and his comrades fight, even as that cause is loftier than his personal ambition. (Wyndham 112)

と論じられているように、戦場で仲間意識が生まれ、仲間との絆が個人主義的な動機よりも大切だと気づいたときに、ヘンリーの魂の救済（redemption）が果たされたのである。

さらに、前に森の中で認識した「自然の掟に従って生きていくこと」、ジムの死を通して認識した「生と死とは裏表のものであること」、これら2つの対自然観と「自分は軍隊の一員である」という対社会観を総合して、自分は自然の一部分であるという境地に至ったのである。ここに来て、ヘンリーは「謙虚な人間」としての成長を完全に遂げたことになる。

やがて敵の攻撃は止み、自分達が無事に生き残れたことをヘンリー達は互いに祝い合う。しかし、自分達のことを「らば追い」と呼んだ将校が連隊長に対して、大した戦果を上げられなかったことに腹を立てる。自分達がどれほど必死に戦ったのかを全く理解せず、らば追いと軽蔑した将校に腹を立てる同僚の兵士に対して、ヘンリーは、自分達の働きをしっかりと評価してくれる上官がいなかったことが不運だったと言って彼をなだめる。このとき既にヘンリーは、自分たちに課せられた理不尽な現実をそのまま受け止めるようになっていたのである。このようにして、ヘンリーは、自己の存在が微小であること、自分は独立した存在ではなく軍隊という集団の一部、ひいては自然の一部であるということを理解することによって、過酷な現実を謙虚な姿勢で生き抜いていくという境地に到達したのである。

人間的成長を果たしたヘンリーは、以後、ジムの死を通して得た「死は恐怖の対象ではなく人間の生の一部分にすぎない」という認識によって、そして自分は自然の一部分であるという謙虚な姿勢によって、死と絶望が渦巻く戦場に果敢に挑み、「愛と不滅の創造物（a creation of beauty and invulnerability [89]）」である敵軍の軍旗を奪うという偉業を見事成し遂げたのである。そして、遂に2日間に渡る激戦が終わりを迎えた。ここに、彼の人間的成長は達成されたかのように見えた。

V. ヘンリーの成長

ヘンリーとウィルソンは、互いに勝利を祝い合った。自分が今まで抱いてきた戦闘本位の考えを捨てて、普段の思考に戻ったヘンリーは、自分が行ってきた戦闘行為がもはや過去のことであり、そこから抜け出せたことに喜びを感じていた。自分の公の行為が実に誇らしいことに喜びを覚え、まるで光を放って華々しく行進しているように見えた。彼はこれらのことを考えながらしばらくの間幸せな時間を過ごした。

ところが、最初の交戦のときに逃走した記憶が有頂天のヘンリーに冷水をかぶせた。そして、戦場で置き去りにされたぼろ服の兵士の亡霊がヘンリーの前に現れる。その目は非難の色に染まっていた。

For a time this pursuing recollection of the tattered man took all elation from the youth's veins. He saw his vivid error, and he was afraid that it would stand before him all his life. (108)

恐怖のために戦場から逃亡したという事実は、幸いなことに戦友達に知られず、しかも、味方兵に受けた頭の傷は「勇気の赤い印」として受け取られ、ヘンリーは敵前逃亡の事実を告白せずにいた。そして激戦が終わった今になって、その事実が亡霊のごとく、どこまでも彼をつきまとうのである。

ヘンリーはいくつかの段階を経て人間的成長を遂げた。しかし、ここで1つの疑問が投げかけられる。それは、彼の人間的成長が敵前逃亡という過去の恥を覆い隠したままの、いわば脆弱な基盤の上に成り立っているということである。果たしてそのような成長を真の成長と言えるのかどうか。押谷は以下のように述べている。

事実、彼の成長を暗示するかのよう、「川の上に重く垂れこめた雨雲の中から、一筋の金色の（golden）日光が射してきた」という一文で、この作品は終わっている。（中略）彼の感じた「成長」は、

戦線離脱の恥辱を隠蔽したままのものであり、その意味で彼の「成長」は、一種の偽善的な、表面を飾るメッキ処理をした (gilded) 成長にすぎないのではないか。(中略) そしてそのような虚飾性にもかかわらず、ヘンリー自身は自分の「静かな成長を感じ」、また戦友からも彼の勇気が称えられるのだが、とすれば、われわれはそこに、クレインの鋭いアイロニーをも感ぜざるを得ないのである。(押谷 142)

ヘンリーは最後の章でも頭に受けた名誉の負傷が実は味方の者に殴られたものであるという秘密が見破られはしまいかと思ひ悩み、仲間を偽っていることを押谷は問題とする。小説の終わりで「ついに彼の目が、いくつかの新しい方向に向かって開かれたように思えた (And at last his eyes seemed to open to some new ways. [109])」と書かれているのは、ヘンリーの成長に対する作者クレインの強烈な皮肉であると主張する。

ヘンリーの成長に疑問をはさむ論者の多くは、彼の「勇気の赤い印」を問題視しており、先ほど引用した押谷の主張を見ても、ヘンリーの成長を否定的なものとして読みたい気がする。しかし、そうかといってヘンリーの成長を簡単に否定できるものなのだろうか。むしろ、ヘンリーはある種の成長を遂げたと私は考えている。

2 日間の激戦が終わった後になって、ヘンリーは逃亡したという恥ずべき事実を隠蔽したままであることを思い出すが、最終的に彼は罪の意識を遠くへ突き放し、そして、“He found that he could look back upon the brass and bombast of his earlier gospels and see them truly. He was gleeful when he discovered that he now despised them.” (109) とあるように、彼は以前の思い上がった理想を今や軽蔑しているのである。Wolford が、

Throughout twenty-three chapters of the novel the major concern is to discover the true nature of heroism. In the final chapter, however, all epic values are specially refuted. Because he forgets the vision that he has found,

and the limited heroism he has discovered, Henry becomes a nonhero. *The Red Badge*, too, is negated, a nonepic. (Wolford 68)

と主張しているように、兵に志願した際に抱いていた理想を捨て去ったことで、彼は英雄になることを完全に諦めたのである。ギリシャ時代のロマンスの世界に憧れていたヘンリーは、しかしながら、その理想よりは幾分か次元が低いかもしれないが、人間として一番重要な本能的な生き方、つまりはどんな状況の中でも謙虚な姿勢で生き抜いていくような生き方をできるようになったのである。それと共に、彼がこれまでに到達してきた「生と死は裏表である」、「自分は自然の一部である」、「自然の掟を受容して生きていく」といった認識とが相まって、彼は謙虚に生を全うする姿勢を貫く者としての「静寂なる成人 (a quiet manhood)」へと変化を遂げたのである。これを果たして成長といえるかどうかはともかく、1つの変化を辿ったことは明確であると思われる。そういった意味では「ある種の成長」である。

ヘンリーの成長を認めない議論の根拠として挙げられるヘンリーの「勇気の赤い印」それ自体は、確かに作品を通してネガティブなものとして描かれているが、やがてはそれがプラスとなって現われてくる。というのも、作品終盤に英雄的活躍をしたことで得意気になってそれを想起したヘンリーが、謙虚に生き抜いて行く姿勢を忘れ、とうに捨て去った英雄像に再び固執してしまいそうになるという危機に陥ったとき、彼の「勇気の赤い印」が亡霊という形をとって、その危機に歯止めをかけたからである。皮肉な偽りの象徴として描かれてきた「勇気の赤い印」のおかげで、自分が敵前逃亡をしてしまったという恥をヘンリー自身は最終的に受け入れ、共に生きていかなければならないという認識に到達するのである。

死者との対面や飛んでくる砲弾に襲われる体験などによって、ヘンリーは絶望して生きる意欲を失う可能性も十分にあった。しかし、ヘンリーはそういったものを乗り越えて、自然の中で生を営んでいる動物のように謙虚に且つ強かに生きていくようになる。人間は自然の一部であるという面に徹して生きていくことや人間は外の環境に左右されて生きていくという自然主義的

な面、それを認めたうえで生きていくということが本当の意味での成長と言ってもいいかもしれない。ヘンリーは、一時期は厳しい自然の掟に絶望するが、次第に彼はそれを受け入れていく。自分は獣に食われる魚のような存在かもしれないが、それが生きることであるという認識に到達する。そういう意味では、ヘンリーの遂げた成長は、いささか居直った成長と言ってもいいかもしれない。

人間には自由意志はなく、全ては外の環境によって決定されてしまうとする自然主義文学において人間的成長は何の意味も持たないことを既に述べた。この *The Red Badge of Courage* という作品は文学史的には自然主義文学と見なされている。それにもかかわらず、この作品の中で人間が成長を遂げることに大きな意味を見出すことができる。そういう意味では *The Red Badge of Courage* はユニークな作品であると言える。

註

- 1 Stephen Crane. *The Red Badge of Courage*. New York: Norton, 1976. をテキストとする。
- 2 ジムの死がヘンリーにとっての一種の「身代わりの死 (vicarious death)」であるとよく言われている。中でも、ジムの「脇腹に受けた傷 (his wound in his side) (キリストも脇腹を槍で突かれている)」や「血だらけの手 (his gory hand) (キリストの手は釘付けされた)」、さらにジムのイニシャルが J. C. であること等を根拠に、ジムがキリスト的役割を担っているというストールマンの説は有名である。キリストは人々の身代わりとなって処刑され、彼の死によって人々の罪が贖われたが、それと同様に、ジムの「身代わりの死」によってヘンリーは再生 (rebirth) の切っ掛けを得たというのである。

Works Cited

- Bassan, Maurice. *Stephen Crane*. New Jersey: Prentice-Hall, Inc., 1967.
- Beaver, Harold. "Stephen Crane: The Hero as Victim," *Stephen Crane's The Red Badge of Courage* (ed. Harold Bloom). New York: Chelsea House Publisher, 1987.
- Crane, Stephen. *The Red Badge of Courage*. New York: Norton, 1976.
- Stallman, Robert Wooster. *Stephen Crane: An Omnibus*. New York: Alfred A. Knopf, Inc., 1961.
- Wolford, Chester. *The Anger of Stephen Crane*. Nebraska: University of Nebraska Press, 1983.
- Wyndham, George. "Crane's remarkable book, New Review," *STEPHEN CRANE: The Critical Heritage* (ed. Richard M. Weatherford), Boston: Routledge and Kegan Paul Ltd., 1973.
- 押谷善一郎『スティーヴン・クレインの印象主義的技法』大阪、大阪教育図書、1987年。
- ガストン・バンシュラル、饗庭孝男訳『大地と休息の夢想』東京、思潮社、1970年。
- 島田太郎「世紀末の美学 スティーヴン・クレインの場合」本間長世編『現代アメリカの出現』東京、東京大学出版会、1988年。
- 中川法城『アメリカの自然主義小説 クレイン、ノリス、ドライサーを読む』東京、英宝社、2001年。
- 渡邊利雄『講義 アメリカ文学史 第Ⅱ巻 東京大学文学部英文科講義録』東京、研究社、2007年。